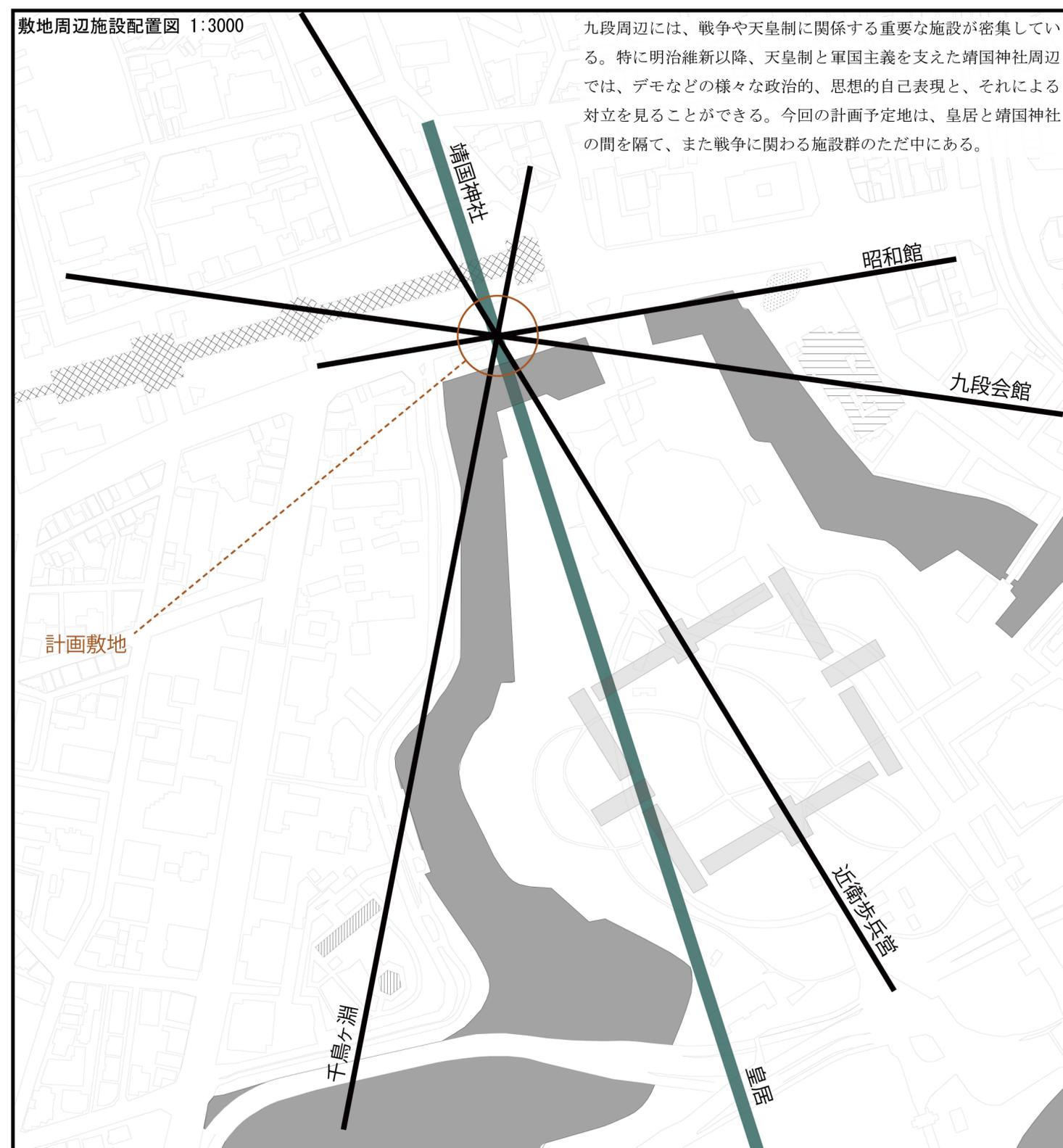


# 戦争の記憶と表象

## 東京都平和祈念館の資料庫移設計画

戦後 75 年が経った今でも、日本には未だ過去の戦争に関する公的な記憶、パブリックメモリーが形成されていない。パブリックメモリーとは、教育やメディア、家庭によって形成され、国家・社会で共有されている歴史認識のことである。自由に自己の価値観や考えを表明できるという点でこれ自体は問題ではないが、今日の日本では戦争に関する価値観や立場が対立した時、対話が目指されるのではなく、「触れない」ことが選ばれがちであり、これこそが大きな問題であると私は考える。

価値観や立場が対立したとき、対話よりも触れないことが選ばれた一つの例として、「東京都平和祈念館」がある。1999 年、東京大空襲に関する資料や体験者の証言映像を保管、展示するための施設として計画されていたこの施設は、その展示方法をめぐる対立ののち凍結された。これにより 300 人を超える空襲体験者の証言ビデオをはじめ、行き場を失った戦争の記憶が人目につかない倉庫で 20 年以上眠ったままとなっている。しかし、パブリックメモリーの存在しない日本だからこそ、確かに存在する戦争体験者の記憶が継承され、人々に公開されていく必要がある。私は、この目黒区の倉庫を、時の情勢により記憶にアクセスできなくなる日本の問題点を象徴する存在と考え、これを都市の中に挿入することで、自由にアクセスできない記憶の存在に人々の目を向けさせ、さらに過去の記憶について変化する解釈や認識に対して、建築として人々の目の前にその存在を定着させることによって、これからの世代における議論のベンチマークとなることを目指した。

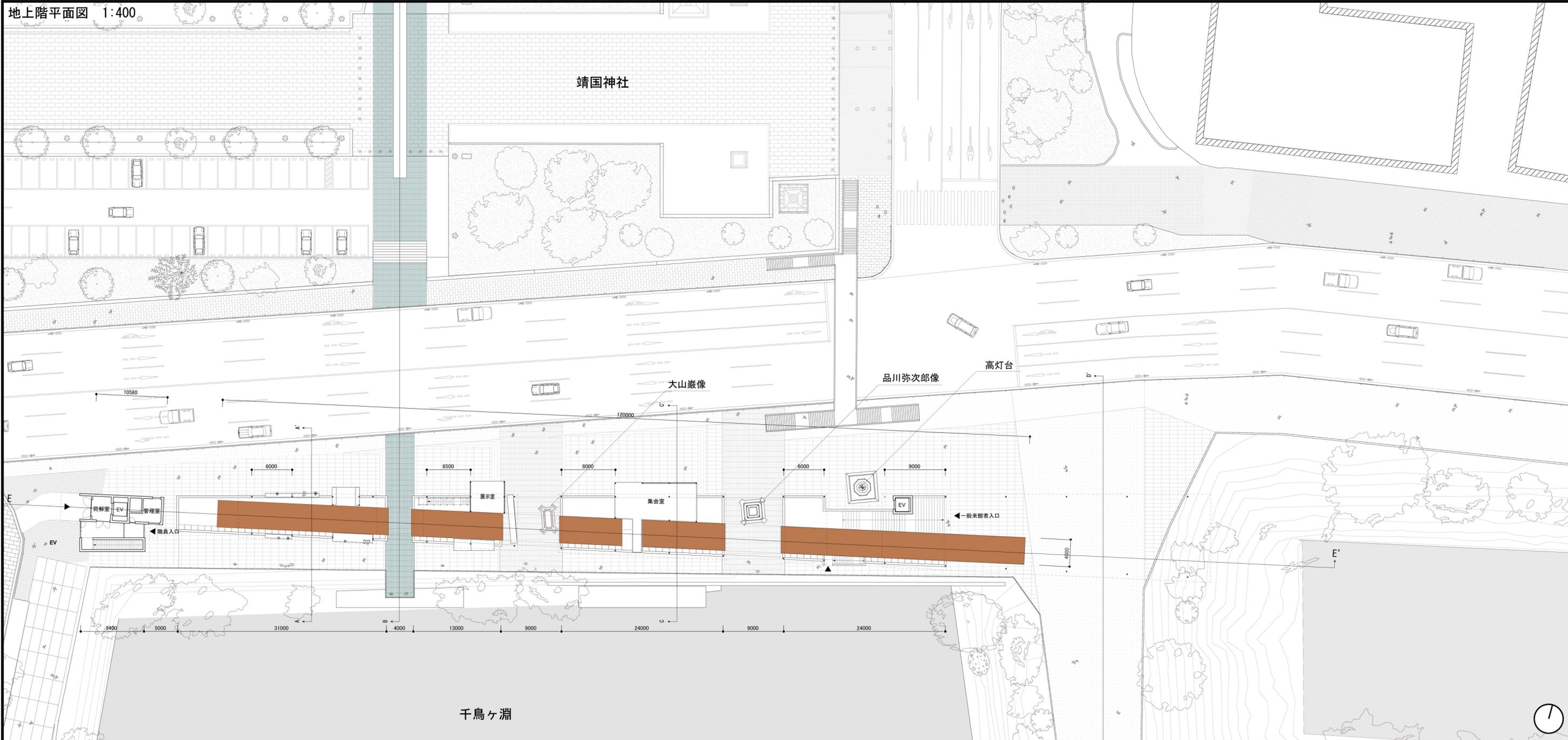


九段周辺には、戦争や天皇制に関係する重要な施設が密集している。特に明治維新以降、天皇制と軍国主義を支えた靖国神社周辺では、デモなどの様々な政治的、思想的自己表現と、それによる対立を見ることができる。今回の計画予定地は、皇居と靖国神社の間を隔て、また戦争に関わる施設群のただ中にある。

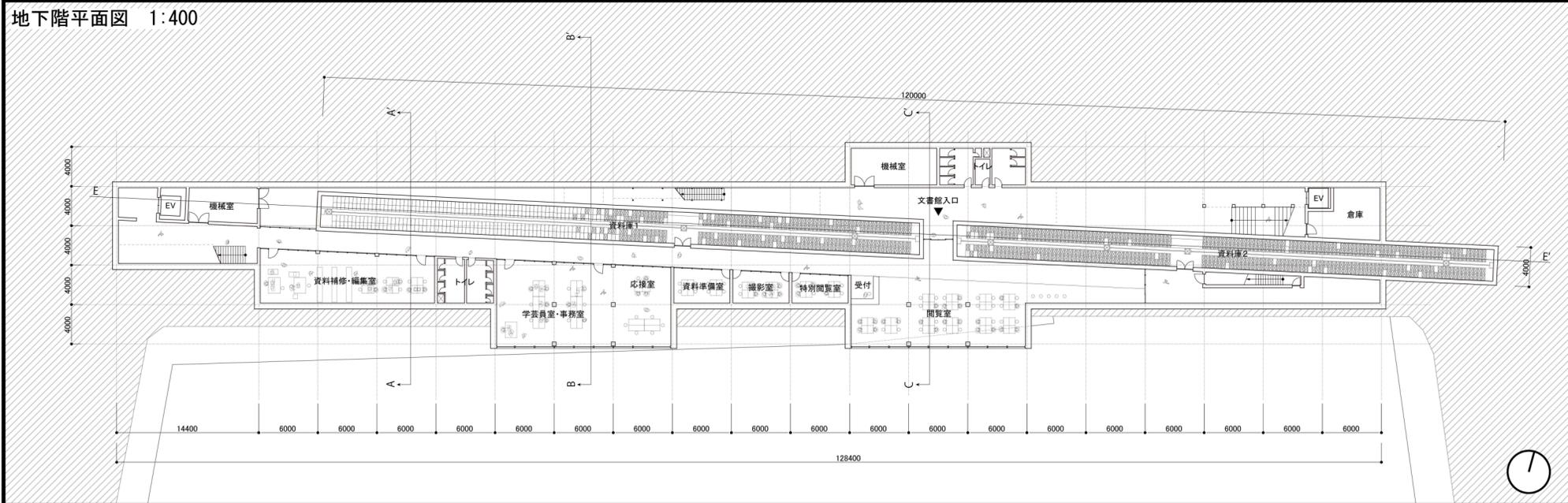


写真引用：『東京新聞』2021. 3. 10

地上階平面図 1:400



地下階平面図 1:400

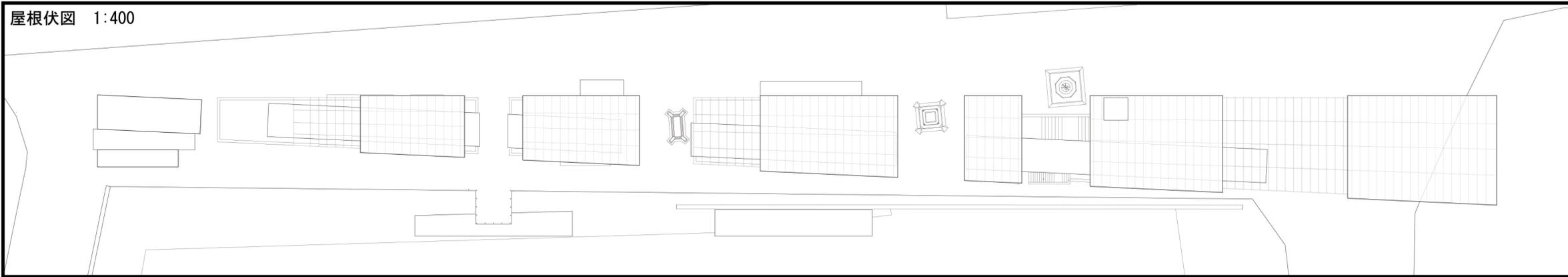


地下には京都平和記念館の資料をはじめとして失われつつある戦争の記憶を収集・維持・管理し、将来的な公開も視野に入れた文書館としての機能を持たせ、地上には戦争の記憶を想起し静かに過ごせる空間や集会室や仮設の展示室、広場をつくり、衝突と対話のための空間を設計した。

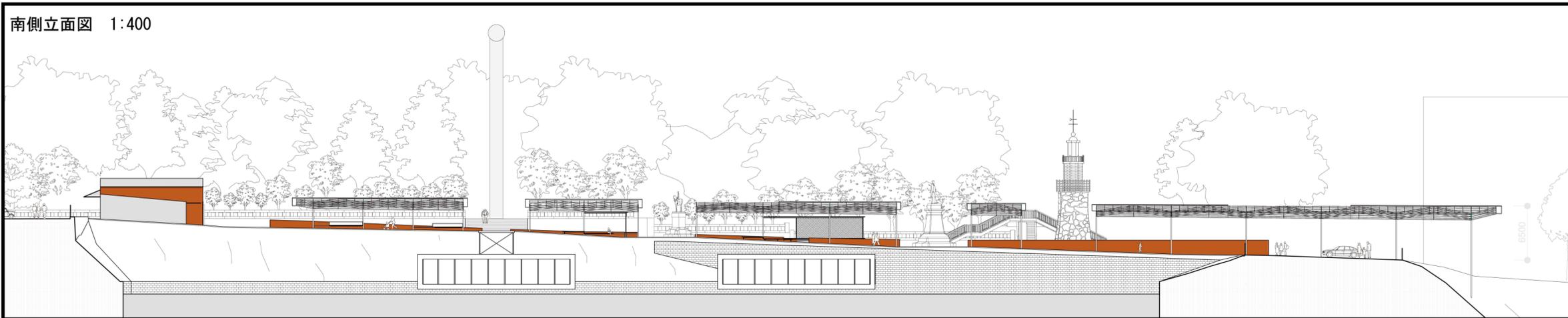
資料庫は敷地の端から端まで、120mにわたり一直線に伸び、靖国神社と皇居の間を隔っている。これにより、細長い形状をしている敷地内全体に記憶の存在を意識させており、これを千鳥ヶ淵側の敷地形状と角度を少し変えることで、この建築の断面に変化をつけた。また、資料庫が牛が淵へと延長されることを想像させ、過去と現在の連続性と、新たな戦争の記憶が生まれることの可能性を表現した。これにより地下では、文書館の一般訪問者と職員の動線を分離している。

この資料庫には、靖国神社と皇居を結ぶ線に沿って上部がへこみ、通路となっている箇所がある。靖国神社や、敷地内からは直接認識することのできない皇居の存在を意識させ、日本の戦争の被害・加害の側面や民衆・国家の複雑な関係性を人々が認識し、多様な議論が喚起されるよう意図した。

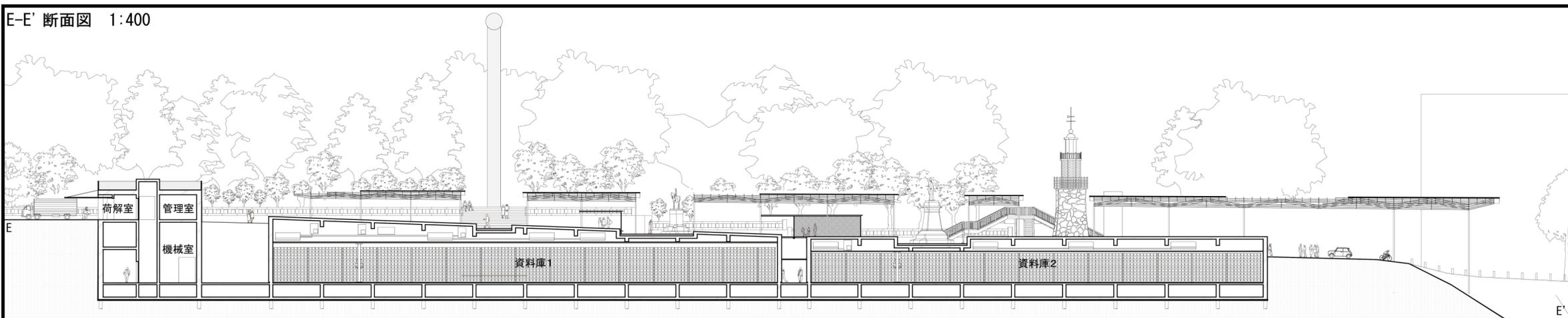
屋根伏図 1:400



南側立面図 1:400

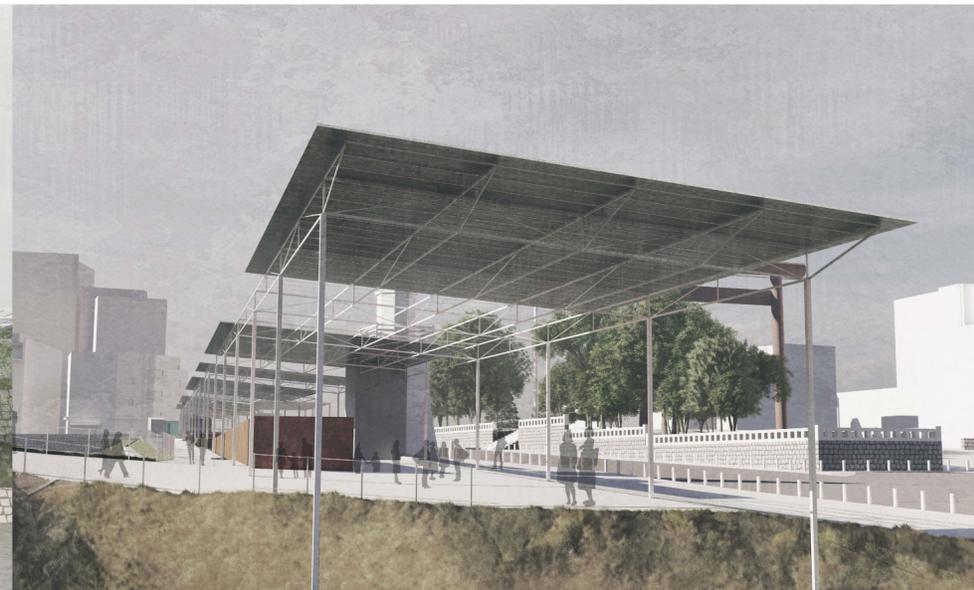


E-E' 断面図 1:400

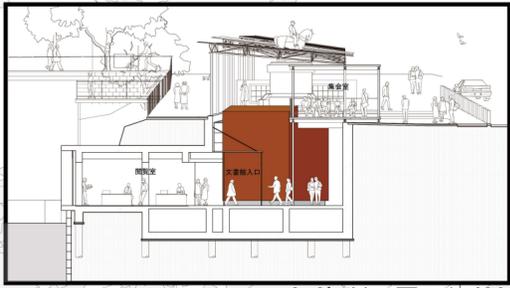
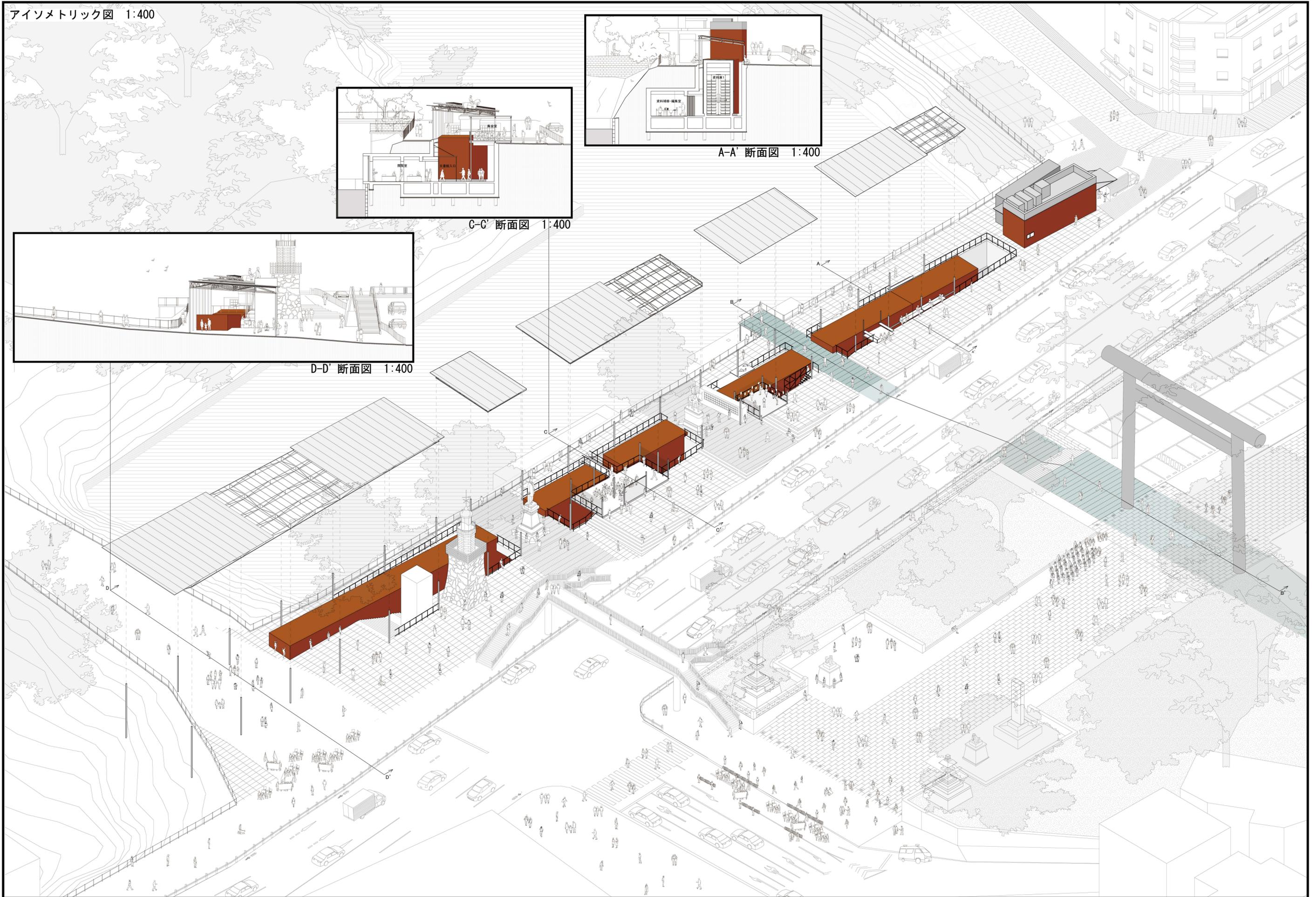


資料を保管する活動は不変であるべきだが、それを解釈したり議論する空間は変化するものであるため、資料庫や地下部分が鉄筋コンクリート造であるのに対し、屋根は鉄骨造とした。また、人々がこの資料庫、つまり記憶の周りで活動することによって必要となる屋根は同時に資料庫を保護する屋根となる。しかしところどころにある屋根の切れ目によって、資料庫の様々な表情をつくり、記憶の継承における不安定さを表現した。

この敷地を端から端まで歩くと、資料庫によって遮られる視線、靖国神社から延びる軸線によって開ける視野、またそれによって切れ目の入る資料庫、雨さらしの資料庫...といった様々な空間を体験することができ、訪れる人々が日本が体験した戦争やその体験者、それらをめぐる現在の複雑な立場を想起できるようにした。



アイソメトリック図 1:400



C-C' 断面図 1:400

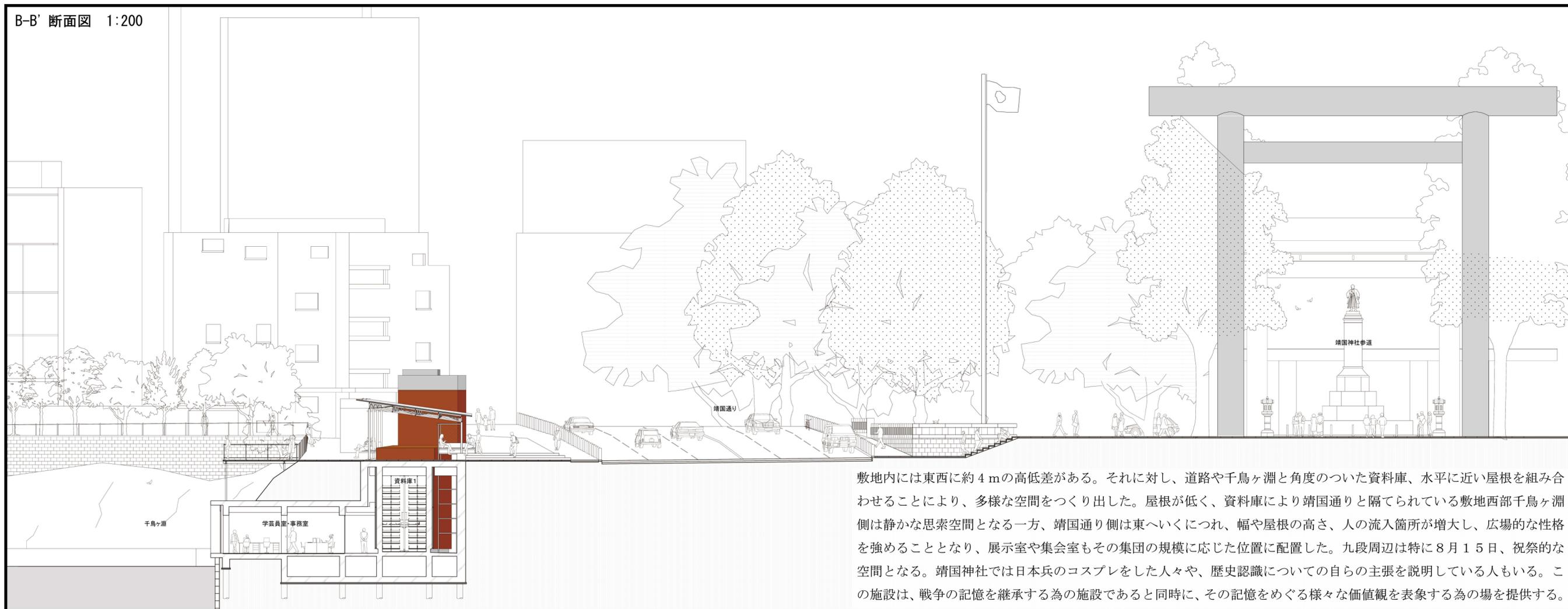


A-A' 断面図 1:400



D-D' 断面図 1:400

B-B' 断面図 1:200



敷地内には東西に約4mの高低差がある。それに対し、道路や千鳥ヶ淵と角度のついた資料庫、水平に近い屋根を組み合わせることで、多様な空間をつくり出した。屋根が低く、資料庫により靖国通りと隔てられている敷地西部千鳥ヶ淵側は静かな思索空間となる一方、靖国通り側は東へいくにつれ、幅や屋根の高さ、人の流入箇所が増大し、広場的な性格を強めることとなり、展示室や集会室もその集団の規模に応じた位置に配置した。九段周辺は特に8月15日、祝祭的な空間となる。靖国神社では日本兵のコスプレをした人々や、歴史認識についての自らの主張を説明している人もいる。この施設は、戦争の記憶を継承する為の施設であると同時に、その記憶をめぐる様々な価値観を表象する為の場を提供する。

